

第一話 オネシヨ少年の優月

星野優月は暗闇の中ひたすら逃げていた。背後から迫るのは恐ろしい化け物。

大きな牙。真っ赤な顔。昔話に出てくる鬼のようなヤツら。

(助けて、ママあ……)

泣きそうになりながら、それでも必死に走る優月と。

突然足下から地面が消えた。

いや、違う。

傾斜七十度ほどの坂道に気づかず転げ落ちた。

(わっ、わっ、わああ)

転げ落ちた先は水たまり。

あっという間に、バシャーンと水の中に沈んだ。

(川？ 海？ 湖？)

なんにしても溺れてしまう。

(助けて、助けて……)

優月の意識が消えようとした時。

「優月！」

突然の大声。

そして揺すられる肩。

ゆっくり目を開けると、優月は見慣れた子ども部屋の二段ベットで目を覚ました。

(夢か)

ほっとしたのもつかの間。

夢の中の鬼と同じような形相で、優月を睨んでいる者がいた。

「またやりやがったな！ このクソ兄貴！」

優月を睨んでいたのは二学年下の弟、琢馬。

優月と同じ学校に通う三年生だ。

兄に対する尊敬などみじんも感じさせない琢馬の言葉。

だが、優月もさすがにその理由に気づいている。

「いったい、いつになったら寝小便治るんだ!？」

そう、優月のパンツとズボンはぐっしりと濡れていた。

「ごめん」

優月は小さな声でそう言うことしかできない。

本当は『兄に向かってその口の利き方はどうなんだ』とか言うべきなのだろうけど、なにしろオネシヨをしたばかり。

しかも、優月のオネシヨ癖は筋金入りである。

園児の頃は夜だけでなく、お昼寝の時間も毎日オネシヨ。

学校に入ってから夜は毎日オネシヨ。

五年生になった今でも、三日に二回はオネシヨ。

そんな兄に威厳なんてあるはずもなく。

「じょうだんじゃねーよ、五年生にもなつて寝小便やるーが兄なんて！」

琢馬は容赦がない。

優月は身を小さくするだけだ。

琢馬はもちろんオネシヨなんてしない。幼稚園の頃からだ。

オネシヨだけじゃない。

勉強も、スポーツも、なにかも琢馬は優月よりよくできる。

テレビゲームやランプですら、琢馬には勝てない。

「え、えっと……」

「うごくな、部屋が汚れる！ 母さん呼んでくるから」

琢馬はそう言って部屋を出ていった。

腰を冷たく濡らしたまま数分待つと、母がタオルを持ってやって来た。

「ゆづくん大丈夫？」

「ママ、ごめんなさい……」

優月は涙混じりに言う。

「しょうがないわね」

母は慣れた手で優月のズボンとパンツを脱がし、タオルで汚れを拭いていく。

「ごめんなさい」

消えいりそうな声で言う優月に、母は困った顔をする。

「いいから、お風呂に行つてシャワーを浴びてきなさい」

「うん」

優月は頷いて下半身丸出しのまま風呂場に向かった。

廊下に出ると、リビングから琢馬の「なっさけねーの」という嘲り声が聞こえる。

「こら、お兄ちゃんに意地悪言わないの」

母が琢馬を諫めているが、それすら優月にとっては情けなく感じてしまう。

(なんで、オネシヨ治らないんだろう)

優月だって、わざとオネシヨをしているわけじゃない。

昨日だって寝る前にはちゃんとトイレに行っただ。

それでも、朝起きると漏らしてしまっていたのだ。

情けなくて情けなくて、泣きたくなる。

実際脱衣所の鏡に映った優月の瞳には涙がたまっていた。

シャワーを浴びて、着替えてから食卓へ。

母が朝食を用意してくれていた。

父と琢馬はすでに着席済。

「優月、またやったのか？」

父に聞かれる。

もちろん、またオネシヨをしたのかという意味だ。

「……うん」

小さな声とともに頷く優月に、父よりも先に琢馬が言う。

「どーすんだよ、クソ優月。秋には校外教室があるんだろ？」

そうだ。

学校初の泊まりがけのイベント。

そんなところでオネシヨしてしまったら……

「こら、琢馬。お兄ちゃんに『クソ』なんて言っちゃダメでしょ」

母がそういうが、琢馬は「ふんっ」と不満げ。

「そうだな。優月は『クソ』じゅなくて『おしっこ』だよな」
うう。

言い返したい。

でも、何を言ってもオネシヨをしてしまったという事実の前では意味も無い。

父が琢馬を諫める。

「琢馬、さすがに言葉が過ぎる」

「だってさあ、優月が校外教室でオネシヨしたらどうなると思うんだよ？ 優月はいいいよ、自分の責任なんだから。でも、俺まで『寝小便の弟』って言われちゃう」

確かにそうかもしれない。

優月と琢馬の住む場所は人口減が進んでいて、学校全体で百人くらいしか生徒がいない。

学年が違っても、噂は簡単に広まるだろう。

「確かに琢馬の言うことももつともだ」

父も琢馬の言葉に頷く。

「五年生になっても治らないとなると、ちゃんと専門家に見せた方が良さだろう」

そういつて、父は鞆から一冊のパンフレットを取り出し、机の上に置いた。

その表紙にはこう書かれている。

『夜尿症治療 鬼崎治療所』

どうやら病院のパンフレットのようなだ。

「最近評判のオネシヨ——夜尿症を専門に扱っている病院らしい」
琢馬が声を上げる。

「あー、俺知ってる。この間テレビでやってたもん」

優月も知っている。

というか、琢馬と一緒にテレビを見た。

オネシヨ癖がなおらない子ども達を集めて治療している病院。

時には長期間の入院治療まで行なうらしい。

「で、でも……」

優月は抗弁しようとする。

何しろ、テレビでは子供達はかなり厳しい訓練をしていたのだ。

昼間からおしっこを限界まで我慢させられていた。

しかも、オネシヨやお漏らしをすると体罰までされるのだ。

(あんなところに行きたくない！)

優月は暗にそう訴えるが。

「なんだよ、優月！ オネシヨ治すつもりなのかよ？」

琢馬がピシヤリと言う。

「だってさ、琢馬だってテレビ見ただろ？」

「ああ。優月にはああいう場所で厳しく指導してもらった方がいいだろ」としても、兄に対する言動じゃない。

「そうねえ……確かに、ゆづくんのためにも荒療治が必要かもね……」
母までそんなことを言い出した。

結局、優月にはあらがうことなど不可能だ。

なにしろ、オネシヨをしてしまうのは自分だった。

その治療を嫌がれば、今後もオネシヨを続けるのかという話になってしまふ。

父がさっそくとばかりに電話で病院の予約を取った。

その結果、優月は翌日の朝、学校を休んで病院に行くことになったのだった。

第二話 初めての診察

鬼崎治療所は最近評判だけあって、全国に系列の病院が十ヶ所以上もあるらしい。

優月が連れて行かれた病院は、家から車で一時間の港町にあった。

テレビでは入院治療なども行なっていたので、それなりに大きな施設かと思っただが、普通の一軒家を改造した病院といったかんじだ。

入院病棟はここにはないのだろうか。

それなら少しは安心できる。

初回なので、父だけでなく母も一緒だ。

優月は学校を、父は仕事を休んでまでやってきたのだ。

受付で「予約した星野と申します」と父が言うと、看護婦さんがやってきた。

「星野さんですね。それではまず、こちらの間診票にご記入ください」

母が看護婦さんから間診票を受け取り、書き込んでいく。

ちらつとのぞいてみると、年齢とか持病の有無とかオネシヨの回数とか、そんなことを記入しているらしい。

母が書き終えると、看護婦さんは「では、診察室にご案内します」と優月から親子を連れて行く。

視界の片隅にトイレが目に入る。

そういえば、家を出てからおしっこをしていなかった。

そう思うと、急に尿意が襲ってきた。

「あっつ！」

優月は看護婦さんに声をかける。

「トイレ、行きたいんですけど」

だが、看護婦さんはニッコリ笑ったまま言う。

「ダメよ」

「え？」

まさか、ダメといわれるとは思わなかったため、そのまま聞き返してしまふ。

「診察前におしっこするのは禁止なの。それに、そのトイレは患者さん用じゃないのよ」

「で、でも……」

一度尿意を意識すると、さらに激しくなってくる。

もう一度頼もうとしたが、その前に看護婦さんが言った。

「夜尿症治療の基本はおしっこを我慢することよ。頑張りましょうね、優月くん！」

診察室で待っていたのは眼鏡をかけた壮年の男性医師だった。

医師は定峰慎吾と名乗った。

「星野優月くん、十一歳と。とりあえず、そこに座ってくれるかな。ご両親も後ろの椅子にどうぞ」

優月は頷いて丸椅子に腰掛ける。

定峰は母の書いた問診票を読んでいく。

「五年生で、今でも三日に一回はオネシヨをしてしまう。間違いない？」
たずねられ、優月は小さな声で「はい」と答えた。

恥ずかしいが、嘘をついても仕方が無い。

「睡眠時以外に漏らしてしまうことは？」

「え？」

「昼間、お漏らしはしない？」

「いいえ」

さすがに起きているときはちゃんとトイレに行く。

「ふむ。トイレは一日何回くらい？」

「え、えーつと……」

数えたことがない。

「何時間に一回くらいおしっこをするかでもいいけど」

「それは……一時間に一回か、それ以上くらいです」

「ふーん。授業中にもトイレに行く？」

「たまに」

「それは、我慢しようと思わなかったの？ それとも我慢できないのかな？」

「あんまり、我慢しようと思わなかったです」

その後も色々と問診が続く。

そうこうしているうちに、先ほど感じた尿意はどんどんおおきくなって

いく。

つい、もじもじと股間周りを触ってしまう優月。

「優月くん、いまおしっこしたい？」

定峰に問われ、頷く優月。

「そうか」

だが、トイレに行かせてくれるつもりはないらしい。

尿意に苦しむ優月をよそ目に、定峰は両親に向けて言った。

「優月くんですが、確かに夜尿症でしょう。原因は端的に言えば膀胱におしっこを溜めておく容量が少ないことですね」

定峰の説明を頷きながら聞く両親。

「この場合、治療の基本は膀胱の容量を増やす訓練が最適です。簡単にいうとおしっこを我慢する訓練ですね」

おしっこを我慢する訓練。

いま、まさに優月はおしっこを我慢させられている。

「当院の治療方針は三つ。」

一つは排尿制限です。これは言葉の通り、おしっこをする時間や量を制限することですね。具体的な目標はこれから決めますが、まずは一日三回程度まで減らしましょう」

その言葉の意味を理解し、優月は青ざめる。

一日に三回しかおしっこできないなんて考えられない！

優月は毎日十回はおしっこをしている。

「次に、水分摂取です。排尿制限をすると、子ども達は水分を取らなくなります。それでは意味がありません。毎日決まった量の水分を摂取してもらいます」

定峰はさらに恐ろしいことを言う。

「そして、三つ目。」

これは納得してくださらないご家族も多いですが、当医院では体罰も併用しています」

体罰。

テレビでも言っていた。

お尻を叩くとか、お灸とか、裸で立たせるとか、そういうヤツだ。

さすがに『体罰』という言葉には、母が顔をしかめた。

「先生、それは……」

「お母さんが心苦しいのは分かります。ですが、夜尿症を治すためには、オネシヨやお漏らしをしたら辛い目にあうという戒めが絶対に不可欠です。失敗しても許してもらえない、ちよつと怒られるだけですむと患者が思っているうちは治りません」

定峰はそう断言した。

「この三つの方針にご納得いただければ、治療を開始しましょう。ご納得いただけないならば、どうぞお帰りください」

両親は顔を見合わせる。

優月は不安げに父と母の顔を見やった。

(やだよ、こんなの)

優月は両親が――特に母が拒否してくれることを願った。だが。

「わかりました。よろしく願います」

父が深々と頭を下げ、母も心配そうにしつつも頷いたのだった。

第二話 おしっこ我慢訓練開始!

問診が終わると、優月は看護婦によって病院の地下へと連れてこられた。両親は一階で待っているようだ。

これから、我慢訓練を始めるという。地下の空気はひんやりとしている。

一階は普通の病院だったが、地下はまるで刑務所のような雰囲気だ。壁がコンクリむき出しだからだろうか。

このころになると、優月はかなりの尿意を感じていた。

ズボンの上からずっとオチンチンを抑えている。そうしないと、今にも漏れてしまいそうだ。

「あ、あのっ!」

優月は看護婦に言った。

「お願いです、おトイレ行かせてください!」

しかし、優月の申し出は却下されてしまった。

「ダメよ、もう我慢訓練は始まっているの。これからは決められた時しかおしっこはできませんよ」

なんとなく予想していた答ではあった。

「で、でも、漏れちゃう……」

泣きそうな声で言う優月。

「我慢我慢。男の子でしょ」

看護婦はにこやかに、しかし残酷にそう告げる。

(男とか女とか、そんなの関係ない!)

そう思うのだが、言っても無駄だろう。

地下の一室に入ると、そこには三人の少年と、二人の男がいた。

少年達は白い短パンに半袖シャツ姿だ。

三人ともどこか苦しそうな青ざめた顔をしている。

その理由はなんとなく分かる。彼らも優月と同じく、おしっこを必死に我慢している様子だ。

それも異様に感じるが、それ以上に優月が気になったのが二人の男が持っている物だ。

白衣姿の男達の右手には、それぞれ剣道でつかう竹刀と、競走馬のお尻を叩くような鞭が握られていたのだ。

(…：体罰)

嫌でも思い出される定峰が言っていたその言葉。

そして、以前テレビで見た体罰シーン。

テレビの中で患者の子供達はお漏らしをするたびに、竹刀や鞭で叩かれていた。

看護婦は優月を男達の前へと連れて行く。

「新しい患者です。星野優月くん」

(中略)

「通院訓練で漏らさないようになればそれで治療は終わりだ。だが、それで治らないようなら、入院訓練になる」

入院訓練。

家に帰れず、学校にも行けずということなのか？

「通院訓練で様子を見る期限は通常一ヶ月。それで治らなければ入院だ」

鬼津の表情は、まるで優月をいたぶって楽しんでいるかのようだ。

とても患者を治療する医療従事者とは思えない。

鬼津は優月から視線をそらし、一人の少年に目を向ける。

「そうだよな、尾崎」

尾崎と呼ばれたその少年は優月よりもずっと体が大きかった。ガタイが良いというよりも、まん丸と太っているといった方が正確だろう。

尾崎少年は真っ青な顔をしている。恐怖だけではないだろう。おしっこの我慢が限界といった表情だ。

「尾崎は今日で通院訓練を始めて四週目だ。今日の訓練で我慢できればそれで終わり、できなければ入院だ」

優月は疑問に思う。

(どういう意味？ オネシヨが治ればいいんじゃないの？)

優月の疑問に答えるように尾崎が言う。

「膀胱拡張訓練で合格するには、二四時間の我慢が最低条件だ」

あまりの条件に、優月は驚く。

(そんな無茶な！ それって、丸一日おしっこができないってことじゃないか！)

オネシヨを治すのに、そんなに我慢できる必要があるとはとても思えな

い。

「尾崎は今朝の六時から訓練を開始している。今は昼の一二時。はたして、明日の朝六時まで我慢できるかな？」

ニヤニヤと笑う鬼津。

その表情には『どうせ無理だろう』という嘲りすら見て取れる。

(当たり前だ！)

夜尿症なんて関係なく、普通の人間なら二四時間おしっこを我慢なんて無理に決まっている！ 朝六時から我慢しているというなら、すでに六時間だ。

尾崎少年が限界ギリギリの表情なのも当然だろう。

「尾崎のことはともかく、星野、お前の訓練も始めよう」

優月はなんとなく察した。

ここで行なわれているのは治療や訓練という名前を借りた虐め——あるいは虐待だ。

そして、自分はもう逃げられないのだ。

(中略)

「河合、肝心なことを言っていないだろう？」

鬼津の言葉に、春は「うう」と口ごもる。

それから、顔を真っ赤にして小さな声で言う。

「えっと、その、ボクは毎日オネショしてしまって。昼間学校でお漏らしも……」

しかし、鬼津はゆるしてくれない。

「なんだ、聞こえないぞ。もっと大きな声で話せ！」

「で、でもお」

春はもう泣き出しそうだ。

(かわいそう)

小さな子だけど、やっぱりオネショのことなんて話したくないのだろう。もじもじとしてうつむいてしまっている。

だが、この訓練施設でそんな態度は許されない。

「もっとハキハキしゃべらんか!!」

「えっと、そのお」

鬼津が叫ぶ。

同時に春の背後に郷田が回った。

「河合！ 鬼津教官の言葉が聞こえんのか！」

郷田は叫びながら春のお尻を蹴飛ばした。

「あっ」

幼い春の体はそれだけでよろめいてしまう。

それと同時に……

「あっ、だめえ……」

春が小さく悲鳴のような声を上げた。

その次の瞬間。

彼の短パンの股間部分がじわあつと濡れて黄色く染まった。

蹴られた衝撃で、お漏らししてしまったようだ。

「や、やだあ」

泣きそうな春の声。

だが、一度始まったお漏らしは簡単には止められない。

どんどんおしっこがあふれ出す。

と。

（え？ なんで）

優月は気づく。

春の短パンに異変が起きている！ 黄色く濡れたヶ所が、徐々にボロボロになっていった。

三十秒もしないうちに春の短パンは、ほとんど消えてしまった。

まるで漏らしたおしっこに溶けてしまったかのように。

いや、短パンだけじゃない。

春のおしっこがかかった部分は、シャツもボロボロと溶けていく。

（なに、これ？ この訓練服ってそういう？）

優月は自分達がどんな服を着させられているのか、ようやく理解した。

春のおしっこは、短パンを全部溶かしても止まらない。

必死におちんちんを押さえているが、床におしっこが散らばる。

優月達三人の患者も、春のおしっこで汚れないようによけるしかなかった。

注意事項

- ※本作の著作権は名草にあります。アップロードなどはおやめください。
- ※コピーや印刷は私的利用の範囲内のみでお願いします。
- ※本作はフィクションです。
- ※作中の医療行為・情報は嘘っぱちです。マネしてはいけません！